

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第5回フォーラム検討会議  
議事録

日時：平成25年1月8日（火）10：00～17：30（休憩を含む）

場所：TKP スター貸会議室根津

出席者：13名（順不同・敬称略）

木村（東大）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、  
大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、久保（PONPO）、  
渋谷（元気ネット）、竹中（東大）、丸山（NV研）、諸葛（東大）

オブザーバー：岩田氏（PO）（15：00～16：00 ごろご来訪された）

配布資料

- F5-0. 議事次第
- F5-1. 第4回フォーラム検討会議議事録（案）
- F5-2. 第4回フォーラム検討会議逐語録
- F5-3. フォーラムに関する議論の整理
- F5-4. フォーラムへのご協力をお願い
- F5-5. 原子カムラの概念（発表資料）
- F5-6. 市民参加（発表資料）
- F5-7. 市民参加手法の評価基準（発表資料）
- F5-8. 市民参加の事例紹介（発表資料）
- F5-9. 8つの事例を通しての考察（発表資料）
- F5-10. 平成25年度業務予定

議題

- 0. 議事録確認
- 1. 原子カムラ／コミュニケーション・フィールドのまとめ
- 2. 今後の進め方について検討
- 3. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

## 0. 議事録確認（配布資料 F5-1、F5-2）

木村氏より、資料 F5-1、5-2 に基づき、前回の議事録の確認がなされた。

## 1. 原子カムラ／コミュニケーション・フィールドのまとめ（配布資料 F5-5～F5-9）

竹中氏より、資料 F5-5～5-9 に基づき、調査内容の報告がなされた。詳しい報告の内容は割愛する。重要な論点を以下にまとめる。

### 【1. 1 原子カムラのまとめ（F5-5）】

竹中氏より、今後の分析の方向性が提示された。

- ・ 「主な特徴」をどのように選んだのか、今後示して欲しい。
- ・ メディア内での使われ方の調査も興味深いが、それが一般市民にどの程度伝わっているのか（どういう人が知っているか）を調査してみるのも興味深い。（意外と一般市民は「原子カムラ」という言葉を知らない／ムラびと側が自意識過剰になっているだけかもしれない）  
→ そうだとすれば、境界を越える突破口として、「ムラびと側の自意識（被害者意識）を取り払う」ような取り組みを進めればいいのかもかもしれない。

### 【1. 2 コミュニケーション・フィールドのまとめ】

竹中氏、神崎氏、大石氏により『Fairness And Competence In Citizen Participation』の内容の調査が行なわれていた。竹中氏より調査内容の報告がなされた。（F5-6～F5-9 は同じ文献。内容ごとにまとめられている）

#### ◆F5-6. 市民参加

Renn ら（筆者）の市民参加に対する考えが発表された。特に、Renn らが参考にした「Habermas の分類」が重要視された。

Habermas の分類：スピーチには 4 種類ある。

①認識に関する会話、②事実に関する会話、③規則に関する会話、④感情に関する会話

それぞれを分けて捉えることが重要。Habermas は分けて捉えることができるかどうかは個人の能力によると考えている。よって、会話の機会に制限をかけようとしている。

一方 Renn らは手法によって会話の機会を全員に平等に与えられるとしている。

- ・ この 4 つの違いを参加者およびファシリテーターがしっかり把握した上で議論がなさ

れることが重要だろう。

- ・ *Habermas* の議論も整理しておく必要があるだろう。Renn らの提案は、*Habermas* の何を改善しているのか。

→おそらく *Habermas* は相互理解に重きを置き、相手の意見を否定しないという制限をかけているのではないか。一方 Renn らは、議論の機会が平等でないと市民参加の意味がないと考え、紛争が起きないように手法で保証しつつ、相手の意見に反論する機会を与えることの重要性を主張しているのではないか。

→「反論」を「攻撃された」と捉えられるとコミュニケーションが成立しない。「反論」をうまく前向きな議論へ移行させることが大切。その意味でファシリテーターの役割は非常に重要である。

- ・ フェアネス（公正性）とコンピテンス（能力・専門性）が選ばれた理由は何か。

また、「情報」、「知見」、「解釈」という単語の意味が整理された。この文献では以下のような、専門家がどのように使っているか、という観点で使い分けられていると思われる。

情報：information 専門家全員が同意している事実。確固たる事実。

知見：knowledge 確固たる事実ではないが、多くの専門家の間で使われているもの。

解釈：interpretation 情報や知見に対する専門家個人の考え。

- ・ この 3 つの違いを参加者およびファシリテーターがしっかり把握した上で議論がなされることが重要だろう。

#### ◆F5-7. 市民参加手法の評価基準

Renn らが考案した市民参加手法の評価基準が説明された。

最終的には、この評価基準を参考にしつつ、本プロジェクトに適した評価基準を作成していく必要がある。そのため、この評価基準の内容の把握に十分な時間が取られた。

- ・ 読んで正しく理解される日本語に整えることが重要である。
- ・ 理解を促進する具体的な事例を挿入してはどうか。
- ・ 20 年前の本なので、今とは一般市民の情報へのアクセスの容易さが異なる点は注意が必要であろう。（現在は、インターネットで容易に情報が集められる）
- ・ フォーラムでは参加者にファシリテーターをしてもらう予定。参加者全員にあらかじめファシリテーションのルールを知らせておくべきではないか。  
→ファシリテーションのルールを知っていると、客観的な立場に立った発言ができるようになるという効果もあるだろう。

◆F5-8. 市民参加の事例紹介

市民参加の事例紹介と、Renn らの考案した評価基準 (F5-7) による評価結果が説明された。本の構成として、手法の実践者による手法の紹介と、評価者による評価の 2 章立てがセットになっている。(実践者と評価者は別の人物、かつ評価者は手法の参加者ではない)

- ・ Renn らは、市民参加手法の「実施結果」を評価軸に入れていない。この点はこの評価軸の欠点かもしれない。

◆F5-9. 8つの事例を通しての考察

Renn らによる「まとめ」が発表された。

- ・ 細かく区切りながら、その場で疑問を解決して、それから先に進むという会議の手法は、理解が進む良い手法だ。(具体的事例を織り交ぜるとなお良い)

◆まとめ

最後に木村氏より、今回の議論を受けて、今後取り組むべき事項がまとめられた。

①「フォーラム・マニュアル」の作成 (以下 3つ)

1. 「コミュニケーション・マニュアル (参加者の話し合いのための「技能」として共有するもの)」の作成。Habermas の情報提供の分類や、Renn 文献のコミュニケーション・フィールドの評価リストを読める日本語に直し、作成する。  
→そのまま使うのではなく、「フォーラム」の目的に合うよう、調整が必要。
2. 「フォーラム計画書 (スケジュール、それぞれの目的・注意点、使うツールなど)」の作成。
3. 「フォーラム・ファシリテーターのためのマニュアル (運営側ファシリテーターが注意すべき点など)」の作成。

②本プロジェクトの新規性を学術的にまとめること。

(③本日の議論を踏まえ、「フォーラム」の位置づけ (参加者の選択方法、取り上げるテーマ等) の再検証を行なうこと。)

また、PO のご指摘が紹介された。

- ・ フォーラム参加者が集まらなかった場合のバックアップ手段を検討しておくこと。  
→次回以降、検討していく。

## 2. 今後の進め方について検討

今後の進め方について検討がなされた。本日の議事が「フォーラムの具体的設計とマニュアル要件の洗い出し」や「予備フォーラムの検討」に至らなかったため、次回はそれらを検討する。また、会議を1回追加することになった。以上を踏まえ、今後の日程が決定された。

第6回は1月18日（金）、第7回は1月30日（水）に開催される。フォーラムの具体的設計とマニュアル要件の洗い出しを中心に議論する。

第8回※は2月13日（水）または2月14日（木）に実施される。予備フォーラムを行なう予定である。※その後、2月14日（木）に決定した。

第9回は2月19日（火）に開催される。フォーラム参加者の決定を行なう予定である。

## 3. その他（配布資料 F5-10）

木村氏より、資料 F5-10 に基づいて、次年度の業務予定の概要が説明された。

以上